



最近、コロナの関係もあって自宅で過ごす時間が多くなりました。もったいないことには人生の退屈をテレビで紛らわしている次第です。

そんなある日、テレビのコマーシャルの多さにいらいらしながら、あちこちチャンネルを変えていたのですが、お花できれいに飾り付けられた帽子をかぶり、ピンク色のお洋服を見事に着こなし、お花畑を車を引いて、ゆっくりお散歩しているおばあさんの姿が目飛び込んできました。

年齢は 92 歳才だということを知って大変驚きましたが、ここを訪れる人たちに「ようこそ。ゆっくり楽しんでいってね」と、言葉をかけながら歩むその姿は、ここに咲くお花の優しさそのものようでした。60 歳ごろにご主人と死別され、以来全く元気を無くされていたのだそうですが、「元気で、明るいおばあさんが好きだった」という生前のご主人や、周りの人の事を娘さんから聞かされ、これでは皆さんに申し訳ないと一念発起、広い土地をお花畑の観光庭園として解放され、様々なお花と共に生きてこられたという 30 年という長い歴史があったのです。そして翌年か、翌年翌年におばあさんはこのお花畑に包まれて亡くなられていたそうです。

限られた人生を自分の為だけでなく、誰かのために、何かのために、いのちを燃やしてこられたおばあさんのように生きたいものだ、体たらくに生きる自分に言い聞かせたことでした。

## 天上天下唯我独尊

T・S

天上天下唯我独尊という言葉がありますが、この言葉の意味を知っている人は少ないように思います。これは仏教用語であり、お釈迦様が生まれた直後に七歩歩き発した言葉として伝えられています。(諸説有り)しかし、幾らお釈迦様でも生まれたての赤ん坊が歩いたり話したりするわけがありませんので勿論これは実話ではないでしょう。これは「仏教とは何か」ということを端的に世に伝えるに創作されたお話であると私は思います。

まず、なぜ七歩なのかということですが、仏教には六道という教えがあります。全ての人間は六道(地獄道、餓鬼道、畜生道、修羅道、人間道、天道)という迷いの世界の中で苦しみ続ける存在であるということです。六道についての説明は長くなるので割愛しますが、天も苦しみ世界だということころは興味深いですね。普通、天国や天界というのは良い所だと考えられていて「天国から見守っていてね」という言葉もあります。仏教的には間違っています。この六つの苦しみの世界を超えたところに幸せな世界、つまり浄土があるというのが仏教の考え方なので六歩を超えて七歩目まで歩いたということです。

そして、その浄土とはどんな世界なのか一言で表すと「天上天下唯我独尊」という世界であるということです。この言葉は「私は世間で一番尊い存在なのだ」という意味ですが、これは決して自分だけが偉いという善った考えではなく、私は私のままでいい、あなたはあなたのままでいい、誰かと比べて卑下することもなく、誰かを見下すこともない、差別も偏見もなく、言論の自由、表現の自由、思想の自由などの人権が保障された社会こそが人類が目標とななければならぬ浄土という最上の世界であるということです。だと私は考えています。ですから私は子供達に「浄土って何?」と聞かれれば、「いじめや喧嘩の無い世界だよ」と答えています。

## 今年もお盆が間近になりました。

初盆会等のお勤めご予定の方は、できるだけお早めにご連絡頂けると幸いです。

「お盆がき」にご協力ください。 8月20(月) 午前十時～十一時半(主なお道場のみ)



今年もきれいに咲いてくれました。

40種類以上ある山紫陽花のほんの一部です。

みな個性的な花です。今年は5月中旬には見ごろを迎えました。小さな花が多く華やかさはありませんが、愛らしい花が多いように思います。

それぞれの花に名札を付けて来寺された方に楽しんでいただきました。



深山八重紫



清澄沢



紅



つみつみの



七段花



バレリーナ



万華鏡



小次郎

新品種 ←

# 今月の掲示板

過去を悔やみ

未来を夢見て

今を忘れて

生き続けている私。

私たちは昨日が過ぎて今日になり、そして明日になるといつ時の流れの中で生きているように思っています。

しかし、仏教では過去、未来、現在という捉え方をします。つまり過去を背景とし、未来を内容とした現在を生きよ、という仏からの私の自覚(めざめ)を促す言葉として受け止めるのです。

私たち真宗門徒のご本尊の阿彌陀如来の相(すがた)は「今現在説法二こんげんざいせつぼつ」の相だと教えられています。ただ今、現にましまして説法されているというお姿をいいます。

私たちがご本尊の前でお念仏申すとき、「お前それでよいのか」と呼びかけられてはよいのでないでしょうか。

4回目



## こころの散歩

新「一十一」 十二回連載 樹林  
 宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年立教開宗協賛テーマ  
 南無阿彌陀仏 人と生まれたことの意味をたずねよう  
 — 問い続ける歩みをともし —

ほんとうの念仏を問う  
 何年か前、寺の学習会で参加者から質問がありました。「ほんとうの念仏というのは、どういふもんやね」でしたが、これは根本的なおたずねだなと思いました。

真宗門徒は日常的に念仏を重ねていますが、ほんとうの念仏はいかなるものをかを問うことは、まずありません。親鸞聖人は信仰心の深めを重くみられ、教行信証の執筆にあたっては、行から信を独立させ、あえて「信の巻き」を設けられました。歎異抄の第一段には、短い文節ながら親鸞聖人が到達された境地が述べられています。「弥陀の誓願不思議にたすけまいらせて、往生をとぐるなりと信じて、念仏もつさんとおもいたつこころのおこるとき、すなわち撰取不捨の利益にあずけしめたもつなり」と。御仏の慈悲が心にしみて念仏申そうと思つたとき、すでにあなたは救われているのです。

「念仏もつすまえに救われる」といふのは、革命的な発想であり、信仰の真髄を觀る気がいたします。私どもも、もう一度ほんとうの念仏を問返したいものです。



光受寺御遠念法要

お知らせ

学習会…七月十日(土) 7時～8時半  
 茶話会…毎週金曜日行っています。